

大槻文彦年譜

有備館講座「大槻文彦をめぐる」

2017.8.26 後藤斉

西暦（元号） 事跡

- 1847(弘化 4) 旧暦 11 月 15 日(冬至)、**江戸木挽町(現在の東銀座)で生まれる**。実名清復、通称復三郎、のちに号、復軒(「復」の字は冬至の「一陽来復」から)。
- 1851(嘉永 4) **家学(漢学と詩文)を受ける**。
- 1862(文久 2) 9 月、**開成所に入学、英学・数学を学ぶ**。元服。父はじめ一家で仙台移住。
- 1863(文久 3) 5 月、仙台藩校養賢堂に入る。
- 1866(慶応 2) 閏 4 月、洋学稽古人を命じられて養賢堂にて英学を学ぶ。10 月、江戸に出て開成所に再入学。翌年にかけて、横浜で米国人 J. H. Ballagh らから英学の個人教授。
- 1867(慶応 3) 英国人牧師 M. B. Bailey の『万国新聞紙』の編集員(「日本最初の新聞記者」。「大英
国史」?)。10 月、仙台藩江戸留守居役大童信太夫に伴って京都に。
- 1868(慶応 4、明治 元) 1 月京都で鳥羽伏見の戦いに会する。『慶応卯辰実記』(のちの自筆写本が宮城県図書館蔵)。藩命で仙台、東京などで奔走。戊辰戦争後に入牢した父磐溪のため釈放活動。
- 1869(明治 2) 『北海道風土記』(30 巻)成稿(宮城県図書館蔵)。
- 1870(明治 3) 大学南校に入り、**英学・数学を学ぶ**。
- 1871(明治 4) 箕作秋坪の**英学私塾三叉学舎**に入り、9 月、幹事(塾長)、アルバイトで賃訳。このころから日本文法を志し、国学を独学。
- 1872(明治 5) 6 月 1 日、**文彦と改名**。10 月、文部省八等出仕となり、**英和对訳辞書編纂を命じられる**。『英和大字典』(第 2 卷(AI-AN)の原稿のみ早稲田大学蔵)。
- 1874(明治 7) 師範学校で教科書の翻訳・編集(『万国史略』など)、文部省で『羅馬史略』翻訳。『琉球新誌』。宮城師範学校校長。『日本暗射図』(白地図)作成。『亞非利加誌』訳成(宮城師範学校へて宮城県図書館蔵)。
- 1875(明治 8) 2 月 2 日、文部省報告課勤務となり、西村茂樹課長から**日本辞書の編纂を命じられる**。「擬奉英国女帝書」、「日本文法論」。兄修二(如電)が隠居し、家督相続。
- 1876(明治 9) 一か月間、『朝野新聞』社説を担当。『小笠原島新誌』刊行。「印刷術の史」、「日本「ジヤパン」正訛の弁」、「東洋印刷術の史」。
- 1877(明治 10) 「伊達政宗が遣欧の記事」。『支那文典』(高第丕(T. P. Crawford)・張儒珍共著『文学書官話 (Mandarin Grammar)』, 1869. に解説を付した)刊行。
- 1878(明治 11) 6 月 13 日、父磐溪没。10 月、**文法会第 1 回を開催(1882 年まで 56 回)**。**富田鉄之助に渡英を勧められるが断念**。「竹島松島の記事」。
- 1879(明治 12) 伊香保温泉で湯治(のちにもたびたび逗留)。宿の主人の依頼で『伊香保志』を執筆。
- 1880(明治 13) 『印刷術及石版術』(文部省『百科全書』(Chambers's Information for the People の翻訳)の一部)刊行。
- 1881(明治 14) 富田鉄之助らと仙台造士義会を設立し、育英事業。如電らと白石社を創設し、翌年にかけて**新井白石の『采覧異言』、『西洋紀聞』を校訂刊行**。
- 1882(明治 15) 『伊香保志』、『日本小史』刊行。井上哲次郎抄訳『倍因氏心理新説』を校訂。
- 1883(明治 16) 音楽取調掛兼勤(~1885)、「仰げば尊し」の作詞の合議に加わる。「かなのとも」(の

- ち合同して「かなのくわい」)創立に加わる。土屋政朝訳『刪訂教育学』を閲。
- 1884(明治 17) 「外来語原考」。『言海』の草稿が完成。結婚。
- 1885(明治 18) 「三味線志」編纂(刊行は 1896-97)。
- 1886(明治 19) 3月23日、『言海』稿本の再訂が終わり、文部省に提出。第一高等中学教諭(～1888)。
『言語篇』(文部省『百科全書』)翻訳刊行(初の言語学紹介)。『古事類苑』編集委員(～1887)。
- 1888(明治 21) 作並清亮編『松島勝譜』を校訂。10月26日、**自費出版の条件で『言海』稿本が下賜。**
- 1889(明治 22) 5月15日、『日本辞書 言海』第1冊刊行。『中止断行条約改正論』。
- 1890(明治 23) 玄沢遺稿『金城秘輶』を補訂。『語法指南』刊行。11-12月、次女と妻、相次いで没。
- 1891(明治 24)** 4月22日、『言海』第4冊刊行で完結。6月23日、**出版祝賀会**(富田・高崎正風らの発起で、伊藤博文、勝海舟、榎本武揚、加藤弘之、菊池大麓、物集高見、高田早苗、陸羯南、矢野竜溪、西村、如電らが参加し、西村、加藤、伊藤らが祝辞。福沢諭吉は出席取りやめ)。
- 1892(明治 25)** 再婚。岩手県に転籍。**宮城県尋常中学校校長**(生徒に吉野作造ら)、**宮城書籍館館長**(～1895)。
- 1894(明治 27) 「支倉六右衛門墳墓考」(仙台市北山の光明寺に比定)。
- 1897(明治 30) **『広日本文典』、『広日本文典別記』** 刊行。
- 1898(明治 31) 「和蘭字典文典の訳述起源」。
- 1899(明治 32) 文学博士。海嘯罹災者への寄付により宮城県岩手県から木盃。
- 1900(明治 33) 東京市に転籍。国語調査委員。『日本文法教科書』。
- 1901(明治 34) 帝室博物館列品鑑査掛。「陸奥国遠田郡小田郡沿革考」(天平産金地涌谷説を支持)。
『伊達政宗南蛮通信事略』 刊行(英訳つき)。
- 1902(明治 35) 国語調査委員会委員、主査委員(～1913)。「復軒雜纂」刊行(玄沢遺稿『金城秘輶』に解説を付して収録)。下飯坂秀治編『仙台藩戊辰史』を校訂。
- 1909(明治 42) 『伊達騒動実録』刊行。「宮城県尋常中学校校歌」。
- 1911(明治 44) 帝国学士院会員。
- 1912(明治 45) 5月15日、坂本嘉治馬(富山房)と『言海』増補出版契約。「根岸 御行の松」。
- 1916(大正 5) 従七位から正五位に昇位。12月、『口語法』刊行(国語調査委員会編)。
- 1917(大正 6) 4月、『口語法別記』刊行(国語調査委員会編)。仙台の戊辰戦役殉難者弔魂祭に招かれ、県庁構内武徳殿で講演。
- 1919(大正 8) 「著述病 老体の文彦翁訪問客を謝絶 言海の増補に苦心」(『朝日』2.9)
- 1922(大正 11) 6月、仙台中開校三十年記念式に出席。殉職した小野さつき訓導へ弔慰金と弔文。
吉野作造、大槻校訂の『西洋紀聞』を参考に「新井白石とヨワン・シローテ」を執筆。
- 1923(大正 12) 吉野、仙台中学友会記念号に大槻に因んで「西洋人の日本語研究」を寄稿し、別に「ドンケル・クルチウス日本文典を主題として」を執筆。
- 1925(大正 14) 講書始の講師。吉野ら教え子から、喜寿の祝いに胸像を贈られる(現在、仙台中高蔵)。
- 1928(昭和 3)** 2月17日、**東京根岸の自宅にて没**。法名、言海院殿松音文彦居士。高輪の東禅寺(初のイギリス公使館の地)の、玄沢、磐溪も眠る一族の墓所に葬られたが、墓は非公開。『言海』増補はサ行まで成稿。
- 1932-37(昭和 7-12) 如電、大久保初男、新村出らにより『大言海』刊行。
- 1938(昭和 13) 『復軒旅日記』(大槻茂雄校訂)刊行。